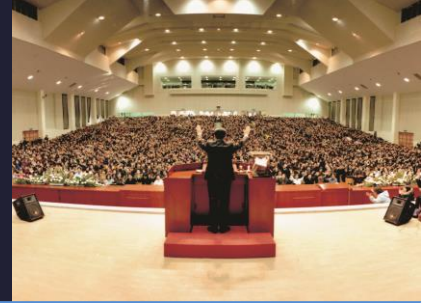


恵みと真理のニュース



2017 年 8 月の四次 恵みと真理教会

韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net



【証】

若い時に相変わらず神様を畏れ愛し仕える幸せな

人生を生きるように導いて下さる神様を賛美します

親の体の具合が悪くて5歳から7歳まで母の実家でお祖母さんの世話になりました。その時から祖母について教会に行くようになりました。祖母の手を掴んで教会に行き来して、区域礼拝と祈り会に行って賛美するのが楽しかったです。教会の勧士だった祖母は誰よりも熱心に主を仕えて性品がとても穏和で謙遜でした。祖母のように私も親の健康が回復するように両手を合わせて切に祈りました。神様の恵みで親が健康を回復して私は家に帰ることが出来ました。

家の近くにある教会学校に通いましたが、13歳になる時から恵みと真理教会に通い始めました。小学校6年生の幼い私の目でも恵みと真理教会の雰囲気活発で暖かくて良かったです。教会学校の伝道士と先生みんな愛が多かったです。中等部から高等部に進級して学生を仕えながら信仰が成熟になりました。どんな奉仕をするか悩んで祈った末、聖歌隊で奉仕を始めました。ベイスパートを担って奉仕しながら神様に賛美する喜びと共に教会で主の事をするのがやりがいとその幸せを知るようになりました。聖歌隊の練習の前まず、音程が正確に声を出して全体のメロディーをよく合わせるように祈りをしたら、練習をしたらおどろくほど祈ったとおり礼拝で上手に賛美捧げることが出来ました。

高校3年生になると予想した通り日々がとても苦難で大変でした。進学と進路を悩んで頑張っ勉強をし、先輩として後輩に礼拝と仕えるにモデルにならなければならなかったので神様の助けを求め祈りました。“神様！私が教会で奉仕を熱心にして勉強もできるよう

に助けてください。“と祈りました。今振り返ってみても過去に戻りたくないほど、とても大変な時間でしたが、神様がくださる慰めと与えてくださった力で忍耐しながら勉強して誠実に礼拝をし奉仕することが出来ました。

2001年高等部を卒業をしてから教会学校の幼稚部の教師として奉仕する生活を続きました。今までは聖餐礼拝だけ、当会長の牧師の説教を聴きましたが、20歳になって平日の礼拝も参席して牧師の説教を聴きました。初めは難しく思いましたが、説教を聴けば聞くほど難しくなくて深い感動を受け恵みで充滿になりました。主が喜ばれるのだけを考え教師と共に水曜礼拝の聖歌隊と主日2部聖歌隊でも奉仕しました。そのように3年間、熱心に信仰生活をしながら軍隊へ入隊しました。2004年8月でしたが、平日礼拝でヨハネの黙示録の講解説教3章まで聞いて最後まで聞かないまま入隊してとても聞きたかったです。軍隊の生活は考えた以上で大変でした。熱さと戦いながら教育訓練を受けました。何よりも心を尽くして神様に礼拝を捧げることが出来なくて賛美することが出来なかったのが残念でした。それで、神様に切に祈りました。すると、祈りを聞かれた神様はそのときから軍宗兵で服務するようにしてくださいました。軍服務をしながら教会を仕え心を尽くして賛美し聖書御言葉を黙想することが出来て感謝しました。

そのように神様の助けの恵みの中で軍生活を終えてオサンに引越しました。オサンからスワン聖殿に行き青年連合会の礼拝も参席しました。平日はスワン聖殿で礼拝と祈り会に参席して主日はアンヤン聖殿で礼拝し教会学校で奉仕を続けました。神様に賛美を捧げ楽しむと幸せで今も恵み賛美合唱団と金曜礼拝聖歌隊で

も奉仕しています。

職場生活がとても忙しくて徹夜する日が多くなる時、まるで月曜祝福祈り会で当会長牧師がマタイによる福音書24書37節から39節の御言葉で説教して下さいました。神様は、ノア時代に洪水で審判した理由を説明して下さり、この世の中でも聖徒は肉親的な事と霊的な事が均衡を保つ生活をするべきだとおっしゃいました。肉親的な事を目的ではなく霊的な事をもっと求めるようにスケジュールを調節して均衡を保つ生活をするようにと話しました。その御言葉が私の心を響きました。職場生活も良くて礼拝中心の生活をするため神様の助けを求めました。そうしたら、神様に環境を変えて下さり、平日礼拝と祈り会も参席するように導いて下さいました。神様の恵みに感謝します。神様はその時、御言葉と祈りと賛美をする均衡を保つ正しい信仰生活をするように平信徒聖書学校にも入って勉強をする恵みも与えて下さいました。このように教会中心、礼拝中心で福ある生活をするように導いてくださる神様に心から感謝と賛美を捧げます。

多く祈っても力を尽くしてもいつも弱さと足りなさを感じます。そうして、聖霊に満たされ足りなさがないように神様に祈ります。御言葉と祈りでいつも目を覚ましていて信仰で勝利し、主の喜人になるように祈ります。御言葉を聴き福音伝道に献身する人生を生きるように祈ります。主の御心をよく分別して教会で職場でもいつもどこでも神様に栄光を捧げる生活をするように祈ります。祈りを聞いて答えてくださる主にすべての栄光を捧げます。



【信仰コラム】

“しかり”だけあって“否”がない

“...あなたがたに宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「しかり」となると同時に「否」となったのではない。そうではなく、「しかり」がイエスにおいて実現されたのである。...”(コリント人への第二の手紙 1:19, 20)

私達は一生の間“はい”と“いいえ”を数多く話します。そう話した結果がとても些細なので何の意味がない場合があるが、相当に重大な結果をもたらすこともあります。しかし、他の方の“はい”あるいは“いいえ”という意思表示が私自身に影響を与える場合もあります。その中には私達の運命に決定的な影響を及ぼすこともあります。

第一、イエスキリストは父なる神様の思いと要求に対して“はい”だけあって“いいえ”はありませんでした。

犯罪して神様を恐れて園の木の間に身を隠れたアダムとエバを神様が訪れて皮の着物を彼らに着せられました。罪のない獣が血を流して死にました。将来救い主がお越しになり人間の罪を代りに担当し、血を流して死なれるのが啓示されました。人の罪は獣ではなく人が贖わなければならずその人は罪が全くない人であるべきです。結局罪のない神様の独り子が父の思いに従ってこの世にお越しにならなければなりません。天地万物を造りなされた方が人の体を被って時間と空間の制限を受けられこの地に足を掛けて生活し

ながら人々から様々な蔑視と冷遇を受けなければなりません。そして人間の罪を代りに担い十字架につけられて死なれることなのです。これが父なる神様の思いであります。イエス様は完全に従われました。イエス様は捕まえられる前日の夜ゲッセマネで地に伏して汗を血の滴りのように流しながらこのようにお祈りなさいました。“父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください”。

第二、神様の約束はことごとくキリストにおいて“しかり”だけあって“否”と言われるのはありません。

聖書は神様が人間と結んだ言約であり契約であります。神様の全ての賞罰はこの契約によって与えられる応報であります。その言約が果たして有効なことで私達各人々に必ず適用されることかという質問に対する答えが本文にあります。“神の約束はことごとく、彼において「しかり」となったからである”としました。その約束の中で一部を列挙してみます。罪の許しに対する約束があります。神様の子になる約束があります。天国に対する約束があります。神様の尊くて極めて大きい約束はキリストにおいて全て“しかり”となります。神様は彼の約束についてキリストの中にいる者には“否”と言われることはありません。

第三、聖徒達は神様のお言葉について“しかり”だけあって“否”があってはなりません。

主神様の約束と命令を徹底に信じて従うべきだという意味です。神様がノアの箱船を造り洪水審判を供えるよう言われました。箱船の規模が相当なので費用と努力がかなり必要されました。120 年という長い時間を忍耐しなければなりません。また、人々の否定的な忠告とあざ笑いを退かれて耐えなければなりません。ノアは神様が自分に命じられた通りに全て従いました。洪水の以降に神様のお言葉に完全に従った手本の中でアブラハムを除くことができません。100 歳に生んだ一人子を捧物として捧げなさいという神様の命令にアブラハムは何も言わず従いました。キリストの中で“しかり”だけあって“否”がない聖徒は聖書通りに生きていきます。聖書には数多くの約束と共に多くの命令があります。このような命令は私達を抑圧したり縛り付ける綱ではなく従うと幸福と有益を享受させるために与られたのです。

皆さんはキリストの名かで神様に向いて“しかり”と“アメン”だけあって“否”はない従いの生活をしてください。神様の約束と命令に対して“しかり”だけあって“否”がない人より知恵のある人はいません。より強い人はいません。より幸いな人はいません。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム『緑の牧場、清い川』本の語り中」



恵みと真理教会 チョヨンモク 牧師

人は多くの問題に直面しながら生きていきます。問題が発生することはどうしてもできなくでも、その問題を接し考え方や対応態度は、自分が決めることができます。不可抗力的なものではなく、問題は、人々の考え方と対応姿勢に応じて進行と結果が異なります。ですから、私たちが学ぶべきことは、問題を接する信仰的な考え方と対応態度です。聖書はこのようなことについて、私たちに信じられないほどの知識と知恵を提供しています。今日の本文に含まれている民数記 13 章と 14 章に記録された事件もそうです。この二つの章の記録された事件を詳しく見ながら問題を接する信仰的な考え方と対応態度を学ぶようにします

イスラエル民族は、アブラハムから始まります。アブラハムがイサクを生み、イサクがヤコブを生み、ヤコブは十二人の息子を出産しました。神様がヤコブに、イスラエルという新しい名前を与えました。ヤコブ（イスラエル）の息子の中にヨセフは神様の御旨と摂理によってエジプトの総理になりました。ヨセフは彼の父と兄弟たちみんなエジプトへ招いてゴーセン地域に居住していました。それから 400 年余りの歳月が過ぎて、イスラエルの子らは深く繁栄しました。20 歳以上で、戦争にでって行く装丁の数が 60 万人たので推算すると、イスラエルの子孫は、約 200 万人になります

新しい王朝がエジプトを支配してからイスラエル人の子孫を奴隷のように酷使しました。苦しみに耐えられなかったイスラエル人が神様に訴えました。神様が彼らの叫びを聞いて、モーセを、イスラエルの指導者として立てました。モーセの導きでエジプトから出たイスラエル人は、神様が契約されたカナンの地に向かって進みました。イスラエル人がシナイ山に着く時に神様がモーセを通して律法と祭祀法をいただきました

イスラエル人は再び行進してパランの荒野カデシュに至りました。そこで民はモーセにカナンの地に斥候を送るように要求しました。モーセは民の要求を受け入れ、神様の許しと指示に従って、イスラエルの十二部族の十二人を選んで、カナンの地を偵察してくるようにしました。彼らは 40 日間、その地の地形と住民と産物に至るまで詳しく偵察してスパイしました。カナンの地を偵察したことは、信仰的な立場から見ると最良の選択ではありません。最善の道は、神様の真実であられる力を頼って、神様が約束されて命じられたのを素直に従うことです。あえてカナンの地を偵察する必要がありませんでした。しかし、いずれにせよ、カナンの地の偵察を許された以上は、偵察の結果を持って、神様に栄光と感謝を帰するきっかけにしなければなりません。ところが、十人の斥候は、その土地を検出した結果として、不信仰的な見解と態度を明らかにされました。

いなかであるか食い物であるか

カナンの地が果たして乳と蜜の流れる地であるという事実を確認して感じたのは十二人の皆が同じでした。しかし、カナン地の占領については見解が違いました。

十人の斥候が明らかにした見解と判断はこうします。「しかし、彼とともにのぼって行った人々は言った、「わたしたちはその民のところへ攻めのぼることはできません。彼らはわたしたちよりも強いからです」。そして彼らはその探った地のことを、イスラエルの人々に悪く言いふらして言った、「わたしたちが行き巡って探った地は、そこに住む者を滅ぼす地です。またその所でわたしたちが見た民はみな背の高い人々です。わたしたちはまたそこで、ネピリムから出たアナクの子孫ネピリムを見ました。わたしたちには自分が、いながのように思われ、また彼らにも、そう見えたとはいえません」。（民 13：31~33）

一方、ヨシュアとカレブが明らかにした見解と判断はこうします。彼らはモーセの前で民を落ち着かせながら言った、「私たちはすぐに上がって、その地を占めましょう。必ず征服することができます。」でした。十人の斥候の見解とヨシュアとカレブの見解を照らし合わせてみると、感覚的な面では、見解が同じでした。しかし、信仰的な側面では、見解が互いに異なっていました。十人の斥候は、①私たちは、自らを見てもイナゴのように思われる。②その人も同じものである。③私たちは十分に上がって、その民を打たないであろうとしました。ヨシュアとカレブは、①私たちはすぐに上がっていこう。②その土地を占めてみましょう。③必ず勝つとしました。

イスラエルの民は、10 人の斥候たちの話を聞いて絶望感を感じて一晚を嘆き泣きました。すべてのイスラエルの民がモーセとアロンを恨んで、全会衆は彼らに言った、「またイスラエルの人々はみなモーセとアロンにむかってつぶやき、全会衆は彼らに言った、「ああ、わたしたちはエジプトの国で死んでいたらよかったのに。この荒野で死んでいたらよかったのに。なにゆえ、主はわたしたちをこの地に連れてきて、つるぎに倒れさせ、またわたしたちの妻子をえじきとされるのでしょうか。エジプトに帰る方が、むしろ良いではないか」（民 14：2,3）しました。そして「彼らは互に言った、「わたしたちはひとりのかしらを立てて、エジプトに帰ろう」（民 14：4）としました

民が言ったお話を詳しく分析してみましょう。「私たちがエジプトの地で死んでいるのと荒野で死んだらよかったのに」と言いました。この言葉は、イスラエルの民が難関に直面するたびに叫んでいた決まり文句のとおりになりました。慣用語になりました。結局、彼らが言うようになってしまいました。それらのうち、20 歳以上の人々の中に、ヨシュアとカレブ以外のすべての荒野でさまよって死亡した。「私たち妻子が取りつかれてあろう」と予測している言葉をしました。神様を不信すると、完全に外れた予測をすることになります。捕われると心配していた彼らの子供たちは、ヨシュアとカレブの導きの下ですべてがカナンの地に入りました。イスラエルの民は、彼らが「エジプトに帰るのがましだろう」と言いました。彼らは「私たちが一人の長官を立てエジプトに戻ろう。」という言葉をしました。「一人の長官」とは、新しい指導者を意味します。イスラエルの民が神様とモーセに対して恨み不平するだけでなく、実質的な選択の案を持っていました。

これらの代案の提示は、神様の主権に対する挑戦行為です。神様の言葉に逆らって選択の案を立てれば自縄自縛になって自分の墓を掘ることになります。イスラエルの会衆は生まれながらの情報、不信仰的な情報を受け入れた結果として①感情的な混乱に陥りました。②指導者のせいでした。③神様を恨みました。④不定的な予測をしました。⑤滅ぼす道を選びました。ヨシュアとカレブは、十人の斥候が真理を歪曲されるようにする行為と民が神様を恨んで背く行為を到底に耐えて見守ることができませんでした。ヨシュアとカレブは民に向かって声を上げて言いました。「イスラエルの人々の全会衆に言った、「わたしたちが行き巡って探った地は非常に良い地です。もし、主が良しとされるならば、わたしたちをその地に導いて行って、それをわたしたちにくださるでしょう。それは乳と蜜の流れている地です。ただ、主にそむいてはなりません。またその地の民を恐れてはなりません。彼らはわたしたちの食い物にすぎません。彼らを守る者は取り除かれます。主がわたしたちと共におられますから、彼らを恐れてはなりません」（民 14：7~9）

ヨシュアとカレブは民の考えや態度を正すために、信仰を持つようにするために叫びました。まず、カナンの正しい情報を受け入れるように促しました。「私たちが巡って検出した土地は深く美しい土地である」と叫びました。そしてカナンに入るにおける現実的な問題を解決する信仰的な方法を提示しました。神様を喜ばせることが最善の方策であると言いました。「ただ、主にそむいてはなりません」としました。「またその地の民を恐れてはなりません」としました。その理由を 3 つに説明しました。「彼らは私たち食い物だ。」「彼らの保護者は、彼らから去った。」主は私たちと一緒におられる。」しました。カナン住民の保護者は、偶像でした。その偶像の背後にはサタンがあります。サタンは闇の権威を持つ支配者です。光が入ってくると暗さが退いていくように、光である神様を頼りにしていく人の前でサタンは退いていきます。

十人の斥候は、カナンの地を偵察しながら問題点を発見し、自分たちをいながのように劣って考えました。そして、恐怖を落ち入れ民に否定的であり、絶望的な報告をしてエジプトに戻ろうと衝動を持つようにしました。一方、ヨシュアとカレブは問題点を食い物に考えました。そしてまっすぐカナンに進撃して、その地を占めう言いました。問題に直面したときに、神様の言葉を忘れたり、不信と、自分がいながのように劣っていると思われます。そして竦めて消極的になり、後退打つされます。しかし、神様の言葉を通して考えると問題が食い物とされます。そして積極的に能動的に対応します。

愛する皆さんは、聖書に基づく考え方で問題に対応する姿勢を堅持してください。そして当面の問題の前で自分をいながのように劣って考えなく、むしろ問題を食い物と思うようになることをお願いします